[二〇〇二年度大会パネルセッション1] 特別掲載Ⅰ　思想の学と書物の学と

学問の形成と「書物」の集積

高橋　章則

はじめに

「地域」を視点として「思想」と「書物」との関係について検証を加えるのが本報告の目的である。ここで主に取り上げるのは、近世後期に現在の福島市北部に住んだ内池永年（一七六二～一八四八）であり、彼の「書物」蓄積に関わった人物や彼をとりまく歴史的な状況への検討を通じて「書物」が果たす思想史的な役割について考えてみたい。

永年の蔵書形成への言及に先立ち、永年が住んだ「信達」地域（旧国制でいう陸奥国「信夫郡」「伊達郡」の地域の総称）にあった二つの文庫とそれに関わる人々の「書物」の集積と利用の実際を見ておく。

Ⅰ　先行する「信達」の二文庫

(1)曳尾堂文庫

曳尾堂文庫はこの地を代表する豪農であり徂徠学を学んだ熊阪台州（一七三九～一八〇三）とその子磐谷（一七六七～一八三〇）の文庫である。文庫そのものの蔵書目録がないために「万巻」と称された蔵書の全貌を知ることはできないが、曳尾堂文庫の移転先山形で明治九年にまとめられた『曳尾堂蔵書目録』によって蔵書のおおよそを知ることができる。

ただし、熊阪氏の「書物」の入手方法や入手経路については、史料的に限界があるために、ここでは、「書物」蓄積と不可分になされた「出版」の問題を扱い蓄積の問題を解明する糸口としたい。

さて、台州と盤谷には多くの著作があり、それらの過半を出版したのは名古屋の風月堂であった。この風月堂を代表とする名古屋書肆と福島との関連は、次代にも連綿と続くものであり、「書物」研究の重要事項である。

寛政年間は三都の書肆に対する名古屋書肆の台頭がはじまる時期であり、その名古屋の書肆を代表するのが風月堂である。風月堂の出版書の中心をなすのは名古屋藩の儒者たちの著作であるが、同様に台州・盤谷の著作の占める割合も高く、主人風月孫助の出版戦略に東北の台州や盤谷が組み入れられていたことが知られる。

出版書肆は古本を含めた「書物」の流通に関わったから、風月堂と台州周辺の密接な関係の存在は、「書物」蓄積を考える上でも黙過しがたい。台州と同門ないしは知己が多かった名古屋藩の出版文化を支えた風月堂は、東北への「書物」の移動を考える際の検証の中核をなすのである。

ところで、台州・盤谷の評価が出版を通じて海外においてなされ、それが国内での評価に影響していたことに触れておこう。

翁広平は『知不足斎叢書』中の『全唐詩逸』の跋文（「全唐詩逸跋」）で、「其詩集則熊阪邦与其子熊阪秀之南遊稠載録戊亥遊囊、西川瑚之蓬蒿詩集、皆有斐然可観之処、茲又得此三冊、則日本之文学、固非海外他邦所可並也、」と台州・盤谷の『南遊稠載録』『戊亥遊囊』と西川瑚の『蓬蒿詩集』を取り上げ、日本の文学レベルを中国以外の諸国で最も高いものであると評価した。三書はともに古文辞学の詩集であり、台州と西川とは松崎観海門である。

名古屋藩儒の秦鼎（一七六一～一八三一）はこうした海外評を紹介し、その評価は国内に還流している。翁への台州や西川の著作の流れが風月堂の企図であるか否かは判然としないが、翁の評言は、徂徠末流の思想史的な意義を考える上でも、台州・盤谷への当時の評価を考える上でも重要である。今後、「書物」の流れと「思想」評価の成立とを交差させる検証が必要である。

(2)飛鳥山館文庫

古方医小野隆庵（一七一二～一七九五）が、「伊達郡」の宿場町桑折に営んだ文庫が飛鳥山文庫であり、その蔵書目録が『飛鳥山館蔵書目録』である。

主著『古方選』の校訂・出版を契機に熊阪台州に弟子入りした小野隆庵の「書物」の蒐集は自身が「辛苦の上調べ

聚めた」（『隆翁要用録』）と言うほどに念入りなもので、二千冊に及ぶ「書物」の保管も配慮が行き届いたものだった。

地元桑折には医書を扱うような書店があったから、地域を代表する医師隆庵がその書店を通じて「書物」を購入した蓋然性は高い。

さて、隆庵の「書物」蓄積を考える際の要点は、借用書物の「書写」ということである。隆庵が蔵書の中核となし「秘蔵本」の扱いをしたのは、師望月三英（一六九八～一七六四）の著作と所蔵書の「写本」であり、ほとんどは自らの手で江戸において書写したものである。まれに書写人を雇用し「写本」作りをしたとみられるが、実用・実学を前提にした医書は「写本」の形で熱心に蒐集されたのである。

隆庵の「書物」購入依頼の指示書を見ると、臨床治療に用いる場合と研究用とでは理想とする版型が異なるとの言及がある。使用の「場」や使用目的により「書物」に求められる形態は異なる。テクストと形態との関係は一定ではないのである。

蔵書保管についての指示も徹底したもので、子孫は蔵書管理目録の更新を通じて念入りな管理をなした。「書物」の保存維持を自覚的に行ったモデルケースの一つである。

さらに、飛鳥山館蔵書のもつ思想史的な意義として、「書写」行為が学統維持に機能したことを指摘できる。隆庵は「秘蔵本」扱いの医書を自立した医師として認めた弟子に伝写を許し、出版した自著を自立の祝いとして贈呈している。こうした隆庵の「書物」利用の実態は、「書物」の持つテクスト伝達機能以外の「機能」として注目されよう。

以上、内池文庫に先行した二文庫は「信達」の「書物」文化が国内的な広がりのなかで展開したことと「書物」の果たす機能が多面的であったこととを知らせてくれるのである。

Ⅱ　「内池文庫」の形成と永楽屋、沖安海

(a)内池文庫

近江商人として福島の地を本拠に商業活動を行った内池永年（一七六二～一八四八）は、四十歳で隠居し学問生活に入り、五十歳で鈴屋の門をたたいた。永年周辺には桑折代官寺西元栄をはじめ本居大平に弟子入りした人物が多く、彼らは永年を中心に「みちのく社中」という鈴屋門国学グループを形成した。その活動の核は和歌を詠むことにあり、遠隔地からの大平、後には内遠による和歌の指導の要諦は、歌作に用いる語彙の峻別（古語の使用、方言の排除など）にあり、国語学的関心に支えられたものであった。

したがって、教育指導の空間を確保するためには古典籍の備蓄が不可欠であった。事実、内池家には、永年作成の『内池家蔵書目録』をはじめとした数種の蔵書目録が存在し、そうした国学基本文献の蓄積と散逸の諸相とを明らかにする手がかりを残す。

永年の得意としたのは歴史考証であり、考証に用いられた多数の文献が蓄蔵されていた。このことは、永年と学問的交流をもった人物との関係を考える際の論点となる。

さて、永年の蔵書は、毎年の二十両の隠居料と作物収入から捻出されたものであり、「信達」の地において永年が「書物」獲得に払った努力には、並々ならぬものがある。その努力が効果的に実を結んだ背景として指摘すべきは、名古屋の書肆永楽屋の存在、和歌山の本居家、伊勢松坂の本居家の出版事業や「書物」普及に対する配慮である。さらには、永年への「書物」移動を側面で結びつけた鈴屋門人、なかんづく沖安海の存在である。

(b)永楽屋東四郎の「書物」販売

風月堂で修業した永楽屋の初代東四郎は近世名古屋の出版文化を考える上でのキーパーソンである。(ちなみに『古事記伝』をはじめとした鈴屋関連書籍は永楽屋から出版されている。また名古屋藩校明倫堂との関係も深い。)その永楽屋は天保の年間に入り、江戸店を独立させたが、その主人「丈助」の「書物」販売行為には、次のようなものがあった。

目録を送り注文を得る。書簡よって出版情報を提供する。新刊本を発送し、必要書以外を送り返してもらう。注文書で江戸・名古屋の書店仲間にない「書物」を大坂の仲間に発注する、などである。なお、出版地と離れた「信達」の地では、「書物」購入に「駄賃」が不可欠であり、代金のおよそ二割が運送料として計上されている点は注意される。

(c)国学「文献学のネットワーク」

文学・語学・歴史の諸領域における文献考証を基礎とした国学にあって、「書物」は学問展開上、不可欠の存在であった。しかも、その「書物」は内容・形式ともに共通化していることが望ましい。というのは、遠隔地からの指導を効率的に行うためには、師弟ともに同一書(原書の写本、同一版本ないしはその写本)を持つことが要件であったからである。永年・大平間の手紙の中にも、特定の「書物」を話題に上らせたものが多い。

また、永年のもとには鈴屋関係者からの「書物」情報が多く寄せられていた。それは必要書籍の指示であったり近著の購買御礼であったり、また写本作成の斡旋であったりと様々である。そして、そうした情報の伝達には和歌山・

伊勢の鈴屋門人が携わっていた。

学問情報の提供は一義的には学問的な行為であり、門下の協力も学統意識に根ざしたものであった。しかし、著書の購入割り当ての意味合いをも持つ「書物」情報の提供などは、一面では経済行為として見るべき側面が大きい。というのも、「書物」の備蓄要請と販売への関与は鈴屋の経済的基盤の確保、勢力維持につながったからである。

国学の地方展開を考える際にはこうした広義の「書物」情報の持つ多面的な機能に着目する必要がある。国学、言いかえると「文献学のネットワーク」は「書物」の有する学問的・経済的な機能を有効に活用するネットワークでもあった。

ところで、永年の集積した「書物」を借用し閲読したり「写本」として備蓄することが定例の詠歌会の開催とともに「みちのく社中」の日常的な学問行為であった。代官寺西蔵太の「書物」借用はそれを雄弁に物語るものであるが、こうした「書物」を仲立ちとした行為は「社中」の思想の均質化に貢献したことは疑いえない。

(d)沖安海の学問展開

沖安海（一七八三～一八五七）は伊勢型紙の行商を「生業」とした鈴屋門の国学者であった。

伊勢型紙は、全国の染色業者の需要を一手に引き受けており、和歌山藩の庇護のもとで株仲間を形成し、販路の不可侵を厳しく守った。そのなかで、仙台・南部地域を行商圏として確保した安海は、通過地福島の永年のもとをほぼ毎年訪れ、様々な情報をもたらした。

永年の「生業」に関わるのが、地域横断的な米の収穫や米価をめぐる情報であり、そのなかには物価変動を左右する大塩の乱や沼田事件をめぐる政治情報も含まれた。

一方、同時代の国学者の動静や和歌・言語の研究方法、外国情報など学問の諸領域にわたる情報ももたらした。その学問情報の中心は、安海自身が学問的営為として行った文献校訂作業などの情報であり、安海は広範な「書物」関連の情報を定期的に永年に提供していたのである。もちろん「書物」そのものを福島にもたらしたことは言うまでもない。

では、「信達」地域への「書物」の移動にかかわった「学問」の「媒介者」沖安海の学問とはいかなるものであったのか。以下、「生業」を通じて訪れた仙台藩領での足跡を紹介する中で、彼の学問に言及する。

「陸奥産金」という古代史上の一大事件が起こった涌谷（宮城県北部）に長くとどまった安海は、地理的に熟知した当該地に産金の地点を確認し、文献的にも確定した。以後、

安海の基礎的な歴史考証は覆っていないのである。

その「黄金山神社考」でなした文献考証は、国学者の学問研究の基礎でもある『延喜式神名帳』研究に連なるものであった。一方、安海が示した地理や風俗への関心は『蝦夷地図』や屋代弘賢の風俗調査依頼に応えてまとめた『伊勢白子風俗問状答』に結実した。

ところで、涌谷での安海の定宿は薬種商長崎賢孝（一八一一～一八八〇）宅であった。行商の合い間、賢孝に和歌を中心に学問の手ほどきを行った安海は、近隣の北宮沢村（宮城県北部）肝入の岩崎綱雄（一七八八～一八六六）に対しても同様の指導を行っている。岩崎には地域の歴史を考証した『陸奥国軍団旧地考』や『栗原旧地考』などの著作があり、著作中には手紙を通じて安海から指導を受けた旨が記されている。かくして安海のこの地域の学問へ果たした貢献度が高いことがわかるのである。

以上、沖安海は、地域に根ざした諸種の学問領域（地方史・地理・言語）に関心を示し、和歌と歴史考証を中心に遠隔地に居住する弟子に指導を行ったが、その学問領域成立の「場」も教育的指導の「場」の確保も、彼の「生業」を慮外に置いては成り立たなかったことは注目されるのである。

おわりに

儒学・医学・国学を問わず、文献考証行為は基礎的な学問行為であり、その遂行のためには「書物」の備蓄が不可避であった。その蓄積された「書物」には収蔵した「学問者」の学問的関心が刻印される。ゆえに「書物」研究は「思想」研究でもありうる。

「書物」の効果的な蓄積には獲得手段面での工夫が必要であり、出版先進地以外の地方の場合には殊にそうした工夫が不可欠である。内池永年らの蔵書の拡大や体系化へ払った努力の跡は、「書物」の蓄積という「思想」的営為の外延部にある行為の多面的ありかたを可視的に示すのであり、まさに「書物」と「思想」が交差する「場」に現れる具体的論点を提供しているのである。

「学問」「思想」は狭義の「学者」対「学者」の関係のみで成り立つものではない。

「書物」の蓄蔵と移動とを仲立ちした諸存在、なかでも書肆のありかたは彼らの出版の戦略的な意図を含めて、「思想」が転移してゆく際の重要論点たりうる。また、「書物」の蓄蔵・移動に関わる沖安海のような「媒介者」の存在は「思想」の歴史的展開を考える上での論点とすべきで

あろう。「学問」集団には諸種の「人物」が連なるからである。

「信達」の「書物」と「思想」の紹介を目的とした本報告は、「生業」を持つ広義の「学問者」である伊勢白子の沖安海の奥州での活動に着目した。それは、安海が得意とした文献学的な考証を中心とした学問行為は汎用性と応用力とが高く、対面する学問の享受者（弟子など）との関係で、学問の中心軸がいかようにも変動することを示したかったからである。ある時には「生業」との関わりから、またある時には地理的な条件に沿って彼の学問姿勢が受け入れられ、享受者の志向に沿った「学問」が開花した。「生業」からする移動に「書物」・「学問」の移動が伴っていたことの意義は大きいのである。

安海は、型紙を背にし、「書物」を背にした。そして、国学をこの地に運んできた。「人」が「書物」を運び、「書物」は「学問」「思想」を運んだ。「人」に「書物」が乗り、「思想」がその上に乗ってきたのである。「書物」と「思想」が織りなす多様な関係に思いをいたすのである。

参照文献

紙筆の関係から一々の註を付すことができないが、叙述は以下の文献に基づいている。

高橋章則「『曳尾堂蔵書目録』（半沢久次郎蔵書目録・熊阪台州旧蔵書目録）―翻刻と解説―」（『東北文化研究室紀要』第43集）、「蘐園古文辞学と楊雄―熊阪台州・大田南畝と端緒として―」（『文芸研究』第141集）、「奥州熊阪台州・磐谷の著作出版と交友―近世後期の文壇と東北―」（『文芸研究』143集）、「小野隆庵『飛鳥館書籍記（文化五年）』・『飛鳥山館蔵書目録』―翻刻と解説―」（『日本思想史研究』第34号）、「東北大学附属図書館所蔵『小野隆庵旧蔵書について（医学稿本など）』」（『東北大学附属図書館報木這子』26）

『保原町史』第5巻、『桑折町史』第4巻、『福島市史資料叢書』第50集・第58集、『涌谷町史』上、『古川市史』第5巻、『日本庶民生活史料集成』第9巻、岸雅裕『尾張の書林と出版』、中田四郎『伊勢型紙の歴史』、『型紙』（『東北歴史資料館史料集』21）、『三重先賢伝』